

▶ 北海道北広島高等学校 様

〈道立高校〉 R7 年 全学年で導入

1 学年 7 クラス (280 名)、2 学年 7 クラス (275 名)、3 学年 7 クラス (272 名)

【Brains 導入教材・変遷】

R5 年 1 年次

- デジトレ中級英語・前編
- AI ICT テスト Pro
- AI S & W Pro

R6 年 2 年次

- デジトレ中級英語・後編
- AI ICT テスト Pro /
- AI S & W Pro
- ICT トレーニング Pro
- AI 英会話 Pro

R7 年 3 年次

- AI ICT テスト pro
- AI Writing Pro



担当教諭 久松 大樹先生

1. 概要（導入規模・ねらい）

Brains e-Learning を授業内外の学習と評価に組み込み、**学習の質の担保と業務削減を同時に進めました。**
最初は週末課題や小テストを中心に運用を開始、その後 3 年間にわたり、定期考査・講習・パフォーマンステストへと使用範囲を拡張しました。

【主に活用した機能】

- ① e 教材「中級英語・前編/後編」：週末課題（隔週を基本）
- ② AI ICT テスト Pro：小テスト／長期休業明けテスト／定期考査（採点時間ゼロ）
- ③ AI Writing：短いライティング活動（授業 2 回に 1 回程度）
- ④ AI Talking：スピーキング評価（準備時間＋制限時間で一斉実施、文字起こしで評価補助）
- ⑤ 講習での活用：履修クラス作成→受講者限定配信（予習解答を講習前に入力→正答率分析→重点解説）／PDF 問題の配信で復習を簡素化
- ⑥ ICT トレーニング Pro：過去問の取り込みによる模試対策。

定期考査で正答率が 50% 未満だった問題を ICT Test Pro からコピーし、定期考査後の復習課題として配信

2. 課題とアプローチ

紙や冊子の週末課題では解答の丸写しが起こりやすく、教員側も確認・採点に時間を要していました。

また、小テストや考査では印刷・配付・回収・採点・入力・返却といった周辺業務が避けられず、授業内でのフィードバックを十分に確保しづらい状況がありました。

Brains e-Learning の学習ログ（正答率・取り組み状況）を、従来の「全問解説」から「つまずきに焦点化した重点解説」へ転換し、授業の効率を高めました。

3. 運用内容

3-1. 週末課題（e教材・中級英語前編/後編）

隔週配信を基本に1年計画で運用。誤答時の再挑戦や復習ボックスにより、丸写し抑止と反復学習を促進。

英語が得意な層の生徒はタイムアタックのように素早くノーマス完了を目指し、生徒同士で競い合っていました。

英語が苦手な層は解説を参照して弱点に向き合う時間が増えました。

3-2. 小テスト（AI ICT テスト Pro）と授業改善

小テストはAI ICT テスト Pro を使用し、原則ペーパーレスで実施しました。

答え合わせ直後に正答率を生徒に提示し、正答率の低い設問に絞って解説することで、「必要なところ」だけの解説に集中しました。

授業評価アンケートでも、この解説方法の継続を望む声がありました。

長期療養・不登校生徒の学びの保障に向けたオンライン授業でも、教室での授業と同時進行で、リアルタイムで回答・解説が可能となりました。

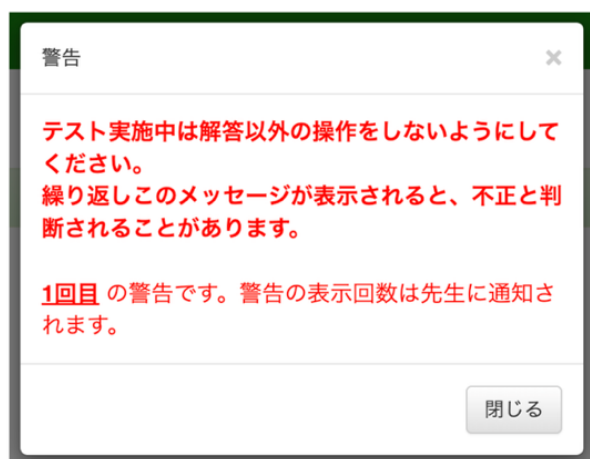
3-3. 定期考査（採点時間ゼロ）と観点別評価

定期考査にも AI ICT テスト Pro を適用し、採点時間ゼロを実現。

考査明けの返却時間を短縮し、授業内で振り返り・再指導に時間を再配分。

観点別評価（知・技／思・判・表／主体的に学習に取り組む態度）を踏まえた設計も可能で、成績処理も効率よくできました。

なお、考査での活用においては、管理職・教務部・英語科教員等と連携し、考査監督者への手順書、画面表示・不正防止ルールと対応方法などの確認の徹底をしました。



警告画面(テスト中に生徒が解答以外の操作をすると
生徒画面に警告が表示、教員にも通知される)

3-4. 講習（放課後・夏期）

様々なクラスの生徒が混じる進学講習においては、オリジナルの「履修クラス」を作成し講習受講者を対象に限定で予習課題として AI ICT Test を配信しました。

教員側は入力状況と正答率を把握し、重点領域に解説を配分しました。

講習を単なる答え合わせの場にせず、弱点に焦点化した効率的な講習運営が可能になりました。

講習後の復習問題を PDF 問題で配信し、取り組み状況の把握とフォローに活用しました。

3-5. AI Writing Pro

自由英作文は AI チェックを前提に、ほとんど全ての単元で Writing の活動を実施した。

AI チェックはパフォーマンス評価というよりはむしろ **Writing の力を高めるにあたってのトレーニング**として繰り返し **AI Writing Pro** を使いました。

入力中は全画面表示になっているため、翻訳サイトなどからのコピー＆ペーストの抑制になり、自分の力で書く環境を作ることができました。

また、「**翻訳自動添削**」機能では、大学入試対策として、和訳・英訳それぞれの課題や演習として配信しました。

本校では、予習として生徒に授業前に入力させ、AI から評価受けたうえで授業に望むことで、生徒は AI に指摘された問題を特に意識的に聞き、教員は生徒がつまづきやすいところを踏まえて解説をすることができました。

(1) 出発の少なくとも 1 時間前には必ず空港に来てください。(青山学院大)
Please be ().
出発 departure

(2) 賢治は、ただ楽しみのためにだけに動物を撃ちに都会からやってくるハンターを憎んでいるようだった。
...を憎む hate
...を撃つ shoot

前の解答者

次の解答者

解答者	評価
 3年1組 南 淳	B 

あなたの解答

please be sure to come to the airport at least one hour before of the departure.
Kenji seemed to hate the hunters who came from the city to shoot nimals only for the enjoy.

AI文法・スペルチェック

1. before of the departure → before departure
・【前置詞の誤り】「before of the departure」は不自然な表現で、「before departure」が正しいです。

2. nimala → animals
・【スペルミス】「nimala」は「animals」のスペルミスです。

3. only for the enjoy → just for fun
・【不自然な表現】「only for the enjoy」は不自然な表現で、「just for fun」が適切です。

和文英訳 予習の評価画面
(AI Writing Pro 翻訳自動添削機能)

3-6. AI Speaking Pro / AI Talking

スピーキングのパフォーマンステストは、AI Talking / AI Speaking を活用して実施しました。

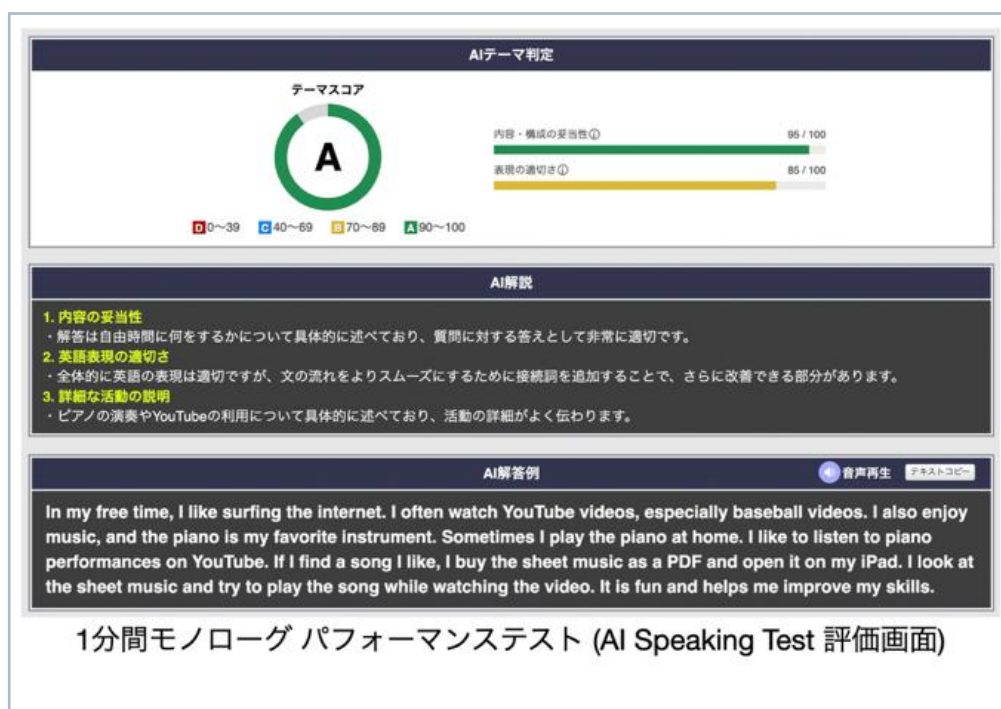
準備時間および録音時間をシステムが厳格に計測・管理できるため、試験の公平性を担保したうえで安心して運用できました。

実施内容は、まず「1 分間モノログ」のように、特定のテーマについて制限時間内に意見・考えを述べる形式から開始しました。

続いて 2 年次には、ディベート技能（反論）を測るパフォーマンステストへ展開しました。

具体的には、相手の立論を画面に提示し、90 秒間の準備時間の後、60 秒間で「相手への反論」と「自分の立場に基づく主張（立論）」を述べさせる形式で実施しました。

また、**生徒の発話が概ね忠実に文字起こしされるため、教員が評価のために音声を確認する際の補助情報として有効でした。**加えて、生徒自身にとっても、**自分の発話を可視化して振り返りリフレクション活動の素材として活用でき、学習効果の向上につながりました。**



Subscription Program

デジトレ英文法/英単熟語/全商英検対策は、期間内 100%終了で
次の教材へ移行、生徒個々の力を伸ばす個別最適学習の実現へ！

株式会社ニューブレイン・アライアンス